

演奏活動

僕は年間約100回の公演を行っていますが、その3分の1が「ケンプ・トリオ」としての室内楽の活動、残りはソロとしての活動です。それが協奏曲なのかリサイタルなのかは、年によって変わります。

ソロはまさしく自分ひとりで演奏するので責任も重いのですが、だからこそ成功したときには、格別の嬉しさがあります。

室内楽では、暗譜で演奏しない分、高いレベルのコミュニケーションが必要となります。ステージ上で新しい挑戦ができる幅が広いことが魅力です。即興的なことがうまくいった時は、特に楽しく感じます。またツアーに出る時に、仲間が一緒だということは嬉しいことです。

協奏曲の場合、ソリストであってもコンサートマスターであっても、みんなが同じ方向に向かって、色々なタイプの指揮者のもと、共同作業をしていきます。室内楽と似ている部分もあります。良い指揮者、良いオーケストラとの共演には、自由に演奏できる可能性があります。うまく演奏できて、オーケストラがそれに反応してくれた時に、特に充実感をおぼえます。協奏曲を演奏すること自体が、刺激に満ちたことなのです。同じ組み合わせでも少しずつ何かが違うので、毎回、学ぶことがあります。

今のところ室内楽、リサイタル、協奏曲の活動が互いに良い影響を与えていると思います。

—演奏する際に重視されることは？

演奏することが単なるルーティーンの仕事にならないように、その一瞬にしかない自然に湧き出てくるもの、自発性を伝えることを重視しています。いつも誠実に演奏して、聴いてくださる方とコミュニケーションしていきたいですね。

「皇帝」

大好きな作品です。この数年はリクエストされる機会も多く、よく演奏しています。

—過去の「皇帝」の公演で印象的なものはありますか。

2、3年前のことですが、公演の1ヶ月前には売切れてしまった「皇帝」の演奏会。ロンドンのロイヤル・アルバート・ホールで弾く初めての公演だったので、とても印象に残っています。また、サンフランシスコ交響楽団と初めて共演したのもこの曲でした。

—どんな部分に特に魅力を感じますか。

僕は、技巧的に勝負するようなピアニストにはなりたくないと思っていて、いつもロマンティックでハッピーな暖かい音楽を目指しています。ベートーヴェンがこの作品で表現したかった感情は、まさしくそういうものだと思います。交響曲「英雄」やその他の作品でもそうですが、彼にとって変ホ長調というのは、その象徴的な調なのです。

—ドレスデン・フィルとは、来日直前の6月14日が初めての共演となりますね。

そうです。大好きなドイツの作品をドイツのオーケストラと演奏するのを楽しみにしています。父がドイツ人だからなのか、単なる偶然なのかはわかりませんが、ドイツの音楽には何故か強い思いを感じます。

ピアノとの出会い

子供の頃、僕はどこにでもよくいるようなやんちゃな子供でした。いつも高いテニス・ラケットやゴーカートなどを買ってくれとせがんで、危ないから、高価だから駄目だと言われていたのです。そんな僕が、4歳のクリスマスに連れて行かれたおもちゃ屋さんで選んだのが、店で一番高いおもちゃのピアノでした。

買ってはもらいましたが、高価なものだったので、それ以外のものは何も買ってもらえなかったことをおぼえています(笑)。

一緒についてきた説明書を読んで弾いてみたのですが、6日くらいで終えてしまって、もっと難しいことをやってみたいと思いました。すると、両手でピアノを演奏している人をテレビで見て「これだ!」と思ったのです。

母にピアノを習いに行きたいと言い続けて、ようやくレッスンに行かせてもらえることになったのは4月でした。その時に、本物のピアノを買ってもらいました。

ヴァルヘルム・ケンプ

—ヴァルヘルム・ケンプの親戚にあたられるとか。

6代さかのぼると同じ家系になるんです。彼の大叔父にあたる方が、世界中のケンプの家系を調べた時に僕のところにも知らせが来て、そういうつながりがあることが判りました。父も知りませんでした。10年以上前のことになります。それ以前でも、彼の演奏は好きで、父は車の中で彼の「皇帝」をよく聴いていたんですよ。

残念ながら直接お目にかかったことはありませんが、お嬢さんが、僕がドイツで演奏した時に聴きにきてくださったことがあります。